

思い出草

岡本綺堂

青空文庫

一 赤蜻蛉

私はこうじまち麴町 元園町 一丁目に約三十年も住んでいる。その間に二、三度転宅したが、それは単に番地の変更とどに止まって、とにかくに元園町という土地を離れたことはない。このごろしゅうせ秋晴あしたちまたの朝、巷かいぎゆうに立って見渡すと、この町も昔とは随分変わったものである。懐かん旧の感がむらむらと湧く。

江戸時代に元園町という町はなかった。このあたりは徳川幕府の調練場となり、維新後は桑茶くわちやうえつけじよ栽付所となり、更に拓ひらかれて町となった。昔は薬園であつたので、町名を元園町という。明治

八年、父が始めてここに家を建てた時には、百坪の借地料が一円であつたそうだが、今では一坪二十錢以上、場所に依ては一坪四十錢と称している。

私が幼い頃の元園町は家並がまだ整わず、到る処に草原があつて、蛇が出る、狐が出る、兎が出る。私の家の周囲にも秋の草花が一面に咲き乱れていて、姉と一所に笹を持って花を摘みに行つたことを微かに記憶している。その草叢の中には、所々に小さな池や溝川のようなものもあつて、釣などをしている人も見えた。今日では郡部へ行つても、こんな風情は容易に見られない。

蝉や蜻蛉も沢山にいた。蝙蝠の飛ぶのもしばしば見た。夏

の夕暮には、子供が草鞋わらじを提きげて、「蝙蝠来い」と呼びながら、
 蝙蝠かわほりを追ひ廻していたものだが、今は蝙蝠の影など絶えて見な
 い。秋の赤蜻蛉、これがまた実におびただしいもので、秋晴あきばれの日
 には小さい竹竿を持つて往来に出ると、北の方から無数の赤蜻蛉
 がいわゆる雲霞うんかの如くに飛んで来る。これを手当り次第に叩き落
 すと、五分か十分の間に忽ちたちま数十足の獲物があつた。今日こんにちの子
 供は多寡たかが二足三足の赤蜻蛉を見付けて、珍らしそうに五人も六
 人も追ひ廻している。

きようは例の赤とんぼびよりう日和であるが、殆ど一足も見えない。
 わたしは昔の元園町がありありと眼前めさきに泛うかんで、年ごとに榮えて
 ゆくこの町がだんだんに詰らなくなつて行くようにも感じた。

二 芸妓

有名なお鉄牡丹餅てつぽたんもちの店は、わたしの町内の角に存していたが、
今は万屋よろずやという酒舗さかやになっている。

その頃の元園町もとぞのちようには料理屋も待合も貸席もあった。元園町
と接近した麴町こうじまち四丁目の裏町には芸妓屋げいしやもあった。わたし
が名を覚えているのは、玉吉たまきち、小浪こなみなどという芸妓で、小浪は
死んだ。玉吉は吉原に巣を替えたとか聞いた。むかしの元園町は、
今のような野暮やぼな町ではなかったらしい。

また、その頃のことですら私が能く記憶しているのは、道路のおび

ただしく悪いことで、これは確にたしか今の方がいい。下町は知らず、我々の住む山の手では、商家しょうかでも店でこそランプを用いたれ、奥の住居では大抵すまい行灯たいていあんどうを点していた。家に依ては、店頭よつみせにも旧式のカンテラを用いていたのもある。往来に瓦斯灯がすとうもない、電灯もない、軒ランプなども無論なかった。随つて夜の暗いことは殆ど今の人の想像の及ばない位で、湯に行くにも提灯ちようちんを持つてゆく。寄席よせに行くにも提灯を持つてゆく。加之おまけに路みちが悪い。雪融けゆきどの時などには、夜は迂濶歩うっかりけない位であつた。しかし今このように追剥おいはぎや出齒亀でばかめの噂などは甚だ稀であつた。

遊芸の稽古所というものも著るしく減じた。私の子供の頃には、元園町一丁目だけでも長唄の師匠が二、三軒げん、常磐津の師匠が三、

四軒もあつたように記憶しているが、今では殆ど一軒もない。湯
歸りに師匠のところへ行つて、一番唸^{うな}ろうという若い衆^{しゅ}も、今で
は五十錢均一か何かで新宿へ繰込む。かくの如くにして、江戸子^{えどっこ}
は次第に亡びてゆく。浪花節^{ななわぶし}の寄席が繁昌する。

半鐘^{はんしよう}の火の見梯子^{ひみばし}というものは、今は市中に跡を絶つたが、

私の町内——二十二番地の角——にも高い梯子があつた。ある年
の秋、大風雨^{おおあらし}のために折れて倒れて、凄まじい響きに近所を驚
かした。翌^{あく}朝、私が行つて見ると、梯子は根下^{ねもと}から見事に折れ
て、その隣の垣を倒していた。その垣には烏^{からすうり} 瓜^{うり}が真赤に熟し
て、蔓^{つる}や葉^はが搦^{から}み合つたままで、長い梯子と共に横^{よこ}わつていた。
その以来、わたしの町内に火の見梯子は廃せられ、そのあとに、

関^{せき}運^{うん}漕^{そう}店^{てん}の旗竿が高く樹^たっていたが、それも他に移って、今では立派な紳士の邸宅になっている。

三 西郷星

かの西南^{せいなんせんえき}戦役は、私の幼い頃のことと何にも知らないが、絵^え双^{そう}紙^し屋^やの店に色々の戦争絵のあったのを記憶している。いずれも三枚続きで五銭位。また、その頃に流行^{はや}った唄は、

「紅^{あか}い帽^{シヤツポ}子は兵隊さん、西郷に追われて、トツピキピーノピー」

今思えば十一年八月二十三日の夜^よであつた。夜半^{よなか}に近所の人

皆起きた。私の家でも起きて戸を明けると、何か知らないがポンポンパチパチいう音が聞える。父は鉄砲の音だという。母は心配する、姉は泣き出す。父は表へ見に出たが、やがて帰つて来て「何でも竹橋内たけはしうちで騒動が起つたらしい。時々よぎに流ながれたま丸が飛んで来るから戸を閉めておけ」という。私は衾よぎを被つて蚊帳かやの中に小さくなっていると、暫しばらくしてパチパチの音も止やんだ。これは近衛兵の一部が西南役の論功行賞に不平いだを懷いて、突然暴挙を企てたものと後のちに判つた。

やはりその年の秋と記憶している。毎夜東の空に当つて筭ほうきぼ星しが見えた。誰たれがいい出したか知らないが、これを西郷星と呼んで、先頃のハレー彗星すいせいのような騒ぎであつた。終局しまいには錦絵

まで出来て、西郷・桐野・篠原らが雲の中に現れている図などが多かつた。

また、その頃に西郷鍋というものを売る商人^{あきんど}が来た。怪しげな洋服に金紙^{きんがみ}を着けて金モールと見せ、附髭^{つけひげ}をして西郷の如く^{こし}拵^{こしら}え、竹の皮で作った船のような形の鍋を売る、一個一錢。勿論、一種の玩具^{おもちゃ}に過ぎないのであるが、何しろ西郷というのが呼物で、大繁昌^{おおはんじよう}であつた。私なども母に強請^{せが}んで幾度^{いくたび}も買った。

その他にも西郷糖^{ほか}という菓子を売りに来たが、「あんな物を喰つては毒だ」と叱られたので、買わずにしまった。

四 湯屋

湯屋の二階というものは、明治十八、九年の頃まで残っていたと思う。わたしが毎日入浴する 麴 町 四丁目の湯屋にも二階があつて、若い小綺麗な姐さんが二、三人いた。

私が七歳か八歳の頃、叔父に連れられて一度その二階に上ったことがある。火鉢に大きな薬缶が掛けてあつて、その傍には菓子そばの箱が列ならべてある。後に思えば例の三馬の『浮世風呂』をそのままで、茶を飲みながら将棋しょうぎをさしている人もあつた。

時は丁度五月の始めで、おきよさんという十五、六の娘が、菖しょうぶ蒲はなを花瓶けいに挿さしていたのを記憶している。松平紀義のお

茶の水事件で有名な御世梅ごせめお此このという女も、かつてこの二階にいたということをも、十幾年の後に知った。

その頃の湯風呂には、旧式の石榴口じやくろぐちというものがあつて、夜などは湯烟ゆげが濛々もうもうとして内は真暗まつくら。加之しかもその風呂が高く出来ているので、男女ともに中途の踏段を登つて這入るはい。石榴口には花鳥風月かちょうふうげつもしくは武者絵などが画いてあつて、私のゆく四丁目の湯では、男湯の石榴口に『水滸伝すいこでん』の花和尚かおしょうと九紋きゅうもん龍りゆう、女湯の石榴口には例の西郷・桐野・篠原の画像が掲げられてあつた。

男湯と女湯との間は硝子戸がらすどで見透みすかすことが能たでき。これを禁止されたのはやはり十八、九年の頃であらう。今も昔も変わらないのは

番台の拍子木の音。

五 紙鳶たこ

春風が吹くと、紙鳶を思い出す。暮の二十四、五日頃から春の七草、即ち小学校の冬季休業の間は、もとぞのちよう元園町十九と二十の両番地に面する大通り（こうじまち麴町三丁目から靖国神社に至る通路）は、紙鳶を飛ばす我々少年軍に依て殆どほとん占領せられ、年賀の人などは紙鳶の下をくぐつて往来した位であつた。暮の二十日頃はつかになると、玩具屋駄菓子店等までが殆ど臨時の紙鳶屋に化けるのみか、元園町の角には市商人いちあきんどのような小屋掛の紙鳶屋が出来た。

しるしばんてん

印半纏を着た威勢の好い若衆の二、三人が詰めていて、

糸目を付けるやら、鳴弓うなりを張るやら、朝から晩まで休みなしに忙

しい。その店には少年軍が隊をなして詰め掛けていた。

紙鳶の種類も色々あったが、普通は字紙鳶、絵紙鳶、奴紙鳶やつこで、

一枚、二枚、二枚半、最も多いのは二枚半で、四枚六枚となつて

は小児こどもには手が付けられなかった。二枚半以上の大紙鳶は、職人

かもしくは大家たいけの書生などが揚げることになっていた。松の内は

大供小供入り乱れて、到るところに糸を手繰たぐる。またその間に、

娘子供は羽根を突く。ぶんぶんという鳴弓の声、憂々かつかつという羽

子の音ご。これがいわゆる「春の声」であつたが、十年以来の春の

巷ちまたは寂々せきせき寥々せきせきよりうりよう。往来で迂濶うかつに紙鳶などを揚げていると、

巡査が来てすぐに叱られる。

寒風に吹き晒さらされて、両手に胼ひびを切らせて、紙鳶に日を暮した二十年前ぜんの小児は、随分乱暴であつたかも知れないが、襟えり巻まきをして、帽子を被つて、マントに包くるまつて懷ふところ手でをして、無意味にうろうろしている今の小児は、春が来ても何だか寂しそうに見えてならない。

六 獅子舞

獅子というものも甚だ衰えた。今日こんにちでも来るには来るが、いわゆる一文獅子いちもんじしというものばかりで、本当の獅子舞ほとんは殆ど跡を断

った。明治二十年頃までは随分立派な獅子舞が来た。先ず^ま一行数
 人、笛を吹く者、太鼓^{たいこ}を打つ者、鉦^{かね}を叩く者、これに獅子舞が二
 人^{にん}もしくは三人附添っている。獅子を舞わすばかりでなく、必ず
 仮面^{めん}を被つて踊ったもので、中には頗る巧みに踊るのがあつた。
 彼らは門^{かどぐち}口で踊るのみか、屋敷内へも呼び入れられて、色々の
 芸を演じた。球^{まり}を投げて獅子の玉^{たま}取^{とり}などを演ずるのは、よほど
 至^{むずかし}難い芸だとか聞いていた。

もとそのちよう

たけのうち

元園町には竹内さんという宮内省の侍医^{じい}が住んでいて、
 新年には必ずこの獅子舞を呼び入れて色々の芸を演じさせ、この
 日に限つて近所の小児^{こども}を邸^{やしき}へ入れて見物させる。竹内さんに獅子
 が来たというと、小児は雑煮の箸^{はし}を投^{ほう}り出^だして皆^{みんな}な駈け出したも

のであつた。その邸は二十七、八年頃に取^{とり}毀^{こわ}されて、その跡に数軒の家が建てられた。私が現在住んでいるのはその一部である。元園町は年^{とし}ごとに栄えてゆくと同時に、獅子を呼んで小児に見せてやろうなどという悠^{のんびり}暢^びした人はだんだんに亡びてしまった。口を明^あいて獅子を見ているような奴は、一概に馬鹿だと罵^{のの}られる世の中となつた。眉が険しく、眼が鋭い今の元園町人は、獅子舞を観るべくあまりに怜^{れい}悌^{てい}になつた。

万^{まんざい}歳^{さい}は維新以後全く衰えたものと見えて、私の幼い頃にも已^{すで}に昔^{おもかげ}の倅^{はな}はなかつた。

七 江戸の残党

明治十五、六年の頃と思う。毎日午後三時頃になると、一人のおでん屋が売りに来た。年は四十五、六でもあろう。頭には昔ながらの小さい鬘まげを乗せて、小柄ではあるが、色白の小粋な男で、てつこう手きやはん甲かい脚がい絆いの甲斐甲斐しい扮装いでたちをして、肩にはおでんの荷を担かつぎ、手には洩団扇しふうちわを持つて、おでんやおでんやと呼んで来る。実に佳いいい声であつた。

もとそのちよう元園町でも相当の商売があつて、わたしも度々たびたび買つたところがある。ところが、このおでん屋は私の父に逢あうと相互たがいに挨拶する。子供心にも不思議に思つて、だんだん聞いて見ると、これは市ヶ谷辺へんに屋敷を構えていた旗はたもと下八万騎まんぎの一人いちにんで、維新後

思ひ切つて身を落し、こういう稼業かぎようを始めたのだという。あの男も若い時には中々道楽者であつたと、父が話した。なるほど何処どこかきりりとして小粋なところが、普通の商人あきんどとは様子が違ふと思つた。その頃にはこんな風の商人ふうが沢山あつた。これもそれと似寄によりの話で、やはり十七年の秋と思う。わたしが父と一所いっしょに四谷すずみへ納涼ながら散歩にゆくと、秋の初めの涼しい夜で、四谷伝てんま馬町ちようの通りには幾軒よみせの露店が出ていた。その間に蕙むしろを敷いて大道だいに坐どうつてゐる一人の男が、半紙を前に置いて頻しきりに字を書いていた。今日こんにちでは大道で字を書いていても、銭をくれる人は多くあるまいと思うが、その頃には通りがかりの人がその字じを眺めて幾許いくばかの銭を置いて行つたものである。

私もその前に差懸ると、うす暗いカンテラの灯影ほかげにその男の顔を透すかして視みた父は、一間けんばかり行き過ぎてから私に二十錢紙幣を渡して、これをあの人にやって来いと命じ、かつ与つたらば直すぐに駈けて来いと注意された。乞食同様の男に二十錢札はちと多過ぎると思つたが、いわるるままに札を掴つかんでその店先へ駈けて行き、男の前に置くや否いなや一散に駈出して来た。これに就ては、父は何にも語らなかつたが、恐らく前のおでん屋と同じ運命の人であつたろう。

この男を見た時に、『霜夜鐘しもよのかね』の芝居むつらしようきぶろうに出る六浦正三郎むつかしやうきぶろうというのはこんな人だろうと思つた。その時に彼は半紙むかに対つて「……………茶立虫ちやたてむし」と書いていた。上の文字かみは記憶していな

いが、恐らく俳句を書いて居たのであろう。今日こんにちでも俳句その他で、茶立虫という文字を見ると、夜露の多い大道に坐つて、茶立虫を書いていた浪人者のような男の姿を思い出す。江戸の残党はこんな姿で次第に亡びてしまったものと察せられる。

八 長唄の師匠

もともとのちよう
元園町に接近した麴町こうじまち三丁目に、杵屋きねやお路久ろくという長唄の師匠が住んでいた。その娘のお花さんというのが評判の美人であつた。この界隈かいわいの長唄の師匠では、これが一番繁昌して、私の姉も稽古に通つた。三宅花圃みやけかほ女史もここの門弟であつた。お

花さんは十九年頃の虎列刺^{これら}で死^{しん}でしまつて、お路久さんもつづいて死んだ。一家^{ことごと}悉く離散して、その跡は今や坂川牛乳店の荷車置場^{ぎゆうにゆうや}になっている。長唄の師匠と牛乳商、自^{おのずから}然なる世の變化を示しているのも不思議である。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「五色筆」南人社

1917（大正6）年11月初版発行

初出：「木太刀」

1910（明治43）年11月、1911（明治44）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

思い出草

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>